第一節　松江藩の成立と堀尾氏

一　堀尾氏の入国と領国支配

堀尾吉晴

中世末期に毛利氏の支配下にあった松江市域は、関ケ原合戦による毛利氏の減封によって大きな影響を受けた。毛利氏に代わって入封したのは堀尾氏であったが、堀尾氏は、松江城の築城と出雲国地域の中心としての城下町の建設・整備を行って、現代に至る松江市域の発展の基礎を築いた。以下、堀尾氏の出自と事跡を確認していくことにしたい。

写真1-1　堀尾吉晴木像（春光院蔵）

領主としての堀尾氏の基礎を築いたのは、堀尾吉晴であった。吉晴は、尾張国丹羽郡御供所（愛知県大口町）に天文十二年（一五四三）に生まれたと伝えられる。吉晴の父泰晴は、岩倉城（愛知県岩倉市）の織田信安に仕え、信安が織田信長と対立して滅亡したことから、牢人となった。吉晴は、永禄年間（一五五八～一五七〇）より織田信長に仕え、木下（のちに豊臣）秀吉に付属されたと考えられる。そのため、吉晴は、秀吉の活動のきわめて早い段階から関係を持ち、行動をともにした家臣であった。

そのため吉晴は、秀吉の政治的地位の上昇とともに地位を向上し、天正十年（一五八二）の本能寺の変の後に六〇〇〇石余りの領地を、その三年

後の同十三年には、近江国佐和山城（滋賀県）をあずかる四万石の大名となっている。佐和山城は、彦根城が築城されるまで東海道・中山道と北陸道を押さえる要衝として重視された城であり、吉晴の能力への秀吉の信頼がうかがえる。そして、天正十八年（一五九〇）には、遠江国浜松城主（静岡県）として一二万石の領地を与えられた。また、人物としての吉晴に対する秀吉の信頼は厚く、当時後継者として考えられていた秀吉の甥秀次の補佐役を佐和山時代からつとめ、その秀次の失脚後もその信頼を失うことなく、秀吉に奉公を続けている。

関ケ原合戦前後の堀尾氏の動向

豊臣氏の直系大名であった堀尾氏にとって、その存在自体を揺るがすことになったのが、慶長三年（一五九八）の豊臣秀吉の死であった。

秀吉の死によって、その後継者の地位をめぐる政治情勢は緊迫化し、翌年二月には、大名間の縁組みを禁じる秀吉の遺言を無視して諸大名との縁組みを押し進める徳川家康に対し、ほかの四大老・五奉行が追及する事件が起きる。この事件については和解が成立するのだが、その和解交渉に当たって堀尾吉晴は仲介に奔走し、家康の家臣井伊直政から吉晴の労を感謝する文書が残されている（「譜牒余録」巻六〇）。吉晴には、当時「三中老」として諸大名間の仲介に当たっていたという所伝があるが、この「三中老」の実在性について疑問視する研究者もいる。しかし、吉晴が家康をめぐる姻戚問題で調停の労をとったのは歴史的事実である。

和解が成立した後の政治情勢は、前田利家の死によってさらに緊迫度は増していく。家康は、利家の跡を継いだ前田利長に対して豊臣政権に対する謀反の疑いをかけて政治的圧力を加える。慶長四年十月に、吉晴が越前国府中城（福井県）の留守居役を家康・毛利輝元・宇喜多秀家から命ぜられたことは、利長・家康の間の対立を調整することを期待されたものと思われる。この段階で子の忠氏が堀尾氏の家督を継ぎ吉晴が隠居したとする説も